

# 安全目標 定着いかに

## 理解醸成など課題共有

東シ  
大シ  
など  
ポ

東京大学と日本原子力学会リスク部会、電力中央研究所原子力リスク研究センター(NRRRC)は、東京大学本郷キャンパスで安全目標をテーマとしたシンポジウムを9日に開いた。識者による座談会では、社会とのつながりの視点から安全目標を根付かせる難しさ

が指摘されたが、適切なリスク管理のために安全目標は必要との意見が示された。

最初に登壇した山口彰・東大教授は「安全目標に期待すること」をテーマに講演。2003年8月の原子力安全委員会による安全目標案の中間取りまとめでは、原子力によるリスクの増加抑制に向けた定性的目標と定量的目標が定められたことを紹介した。

性能目標として、炉心損傷頻度(CDF)や格納容器機能喪失頻度(CFF)が定められている。一方、米国には存在する放射性物質の大規模放出頻度に関する目標は日本にはない。山口教授は今後に向けて、日米の違いや過去の議論を踏まえ、何を設計に反映すべきかの議論を進めるべきだと主張した。

マルなど一連の政策を整合的に推進していきたい」と強調。県内事業者への指導を約束したほか、高レベル廃棄物の最終処分については海外の知見なども取

その後は、NRRRCのジョーシ・アポストラキス所長、原子力発電環境整備機構(NUMO)の近藤駿介理事

長を交えた座談会が行われた。アポストラキス氏は、「CDFなどの考え方は必ずしも一般公衆とのコミュニケーションに有効ではない」と指摘。近藤氏は、

「日本では安全目標を使う前の議論に時間が割かれている。まずは使ってみることで、効果的かつ効率的な議論ができる」と語った。

安全目標の必要性や定着に向けた課題をテーマにした座談会などが行われた



安全目標の必要性や定着に向けた課題をテーマにした座談会などが行われた